

機関番号：14101

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008～2010

課題番号：20720237

研究課題名（和文）カナダ先住民の経済的自立をめぐる人類学的研究

研究課題名（英文） Anthropological Study on Economic Independence among the First Nations in Canada.

研究代表者

立川 陽仁（TACHIKAWA AKIHITO）

三重大学・人文学部・准教授

研究者番号：20397508

研究成果の概要（和文）：本研究は、クワクワカワクゥというカナダ先住民を事例に、カナダの先住民社会における経済開発、経済的自立の模索を跡付け、分析することを目的としている。長きに渡り、クワクワカワクゥを支えてきたサケ漁業の衰退をうけ、近年注目されているのがサケの養殖業である。そこで本研究では、クワクワカワクゥによるサケの養殖業の認識と活動を中心に、分析をすすめている。なお、研究の最終年度には、養殖業のほかに、サケ漁業およびアート制作の経済開発の可能性についても議論をおこなっている。

研究成果の概要（英文）：The target of this research project is to trace and analyze some attempts of economic development among the First Nations of Canada, focusing on the Kwakwaka'wakw society of British Columbia. The Kwakwaka'wakw has long been dependent on the commercial salmon fishery and enjoyed a sort of economic success. However, with the depression of the fishery in the 1990s, those people started paying attention to another industry such as salmon aquaculture. Thus this study mainly focused on perception and concrete activities on salmon aquaculture. Besides, in the final year of this project, this study argues economic possibility of other activities such as salmon fishery and art production.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：文化人類学

科研費の分科・細目：文化人類学・文化人類学・民俗学

キーワード：カナダ先住民、クワクワカワクゥ、経済開発、養殖業、アート制作

1. 研究開始当初の背景

北米では、多くの先住民社会が政治的自治権を獲得している。しかし彼らの政治的自治のもくろみは、経済的自立の問題によって大きく阻害されているというのが現状である。そこで各先住民社会がいかにして経済的自

立を達成しようとしているのかが大きな問題として浮上してくるわけであるが、研究開始当時、ほぼいかなる分野でもその説明はなされていなかった。

2. 研究の目的

上記の背景をふまえ、北米の先住民社会における現在の経済的自立の模索を跡付け、その可能性を分析することが本研究の目的となった。その際、マクロな鳥瞰的視点ではなく、あくまで生活世界に根ざした理解をするために、フィールドワークを駆使した人類学的手法を使うことを方法論的に目指し、その具体的な対象として、カナダ、ブリティッシュ・コロンビア州のバンクーバー島を生活圏とするクワクワカワクウ

(Kwakwaka'wakw)という先住民を選ぶこととした。同先住民は、かつてサケ漁業に従事することで近代化への適応に成功し、20世紀を通じて経済的自立を達成してきたと評されてきたものの、近年サケ漁業の不振により新たな経済自立の可能性を模索せねばならなくなった社会である。つまりクワクワカワクウは、「経済的自立とはいかなるものか」ということを過去のみずからの経験からすでに知っている数少ない社会であり、その意味で今後他の先住民社会にとってのモデルとなり得る先住民族であると考えられる。

クワクワカワクウを具体的な調査対象とするにあたり、まずは彼らとサケ漁業、およびサケ漁業を補完するものとして注目されているタイセイヨウサケの養殖業との関係について、中心的に分析することとした。さらに最終年度においては、アート制作にまで視野を広げて分析の対象とすることにした。

3. 研究の方法

すべての年度において、研究は現地でのフィールドワークと文献調査にわかれる。

フィールドワークは毎年9月に約1カ月、先述のクワクワカワクウ社会において実施した。彼らの生活拠点の1つであるキャンベルリバー市を調査拠点に据えたが、アラートベイという別の拠点にも調査でかけたこともあった。フィールドワークでは、サケ漁業およびサケの養殖業の参与観察のほか、労働従事者たちへのインタビュー、先住民団体の調査を中心にこないつつ、ビクトリアやバンクーバーなどの都市部では大学で文献資料の収集もおこなった。

なお、最終年度のフィールドワークでは、上記の経済活動のほか、アート制作に関するフィールドワークもおこない、キャンベルリバー、ポートアルバーニ、ビクトリアなどの都市部ではアーティストたちへのインタビュー、スタジオ見学なども実施した。

それ以外の日本にいる期間には、文献およびフィールドで収集したデータやインターネットで集められる情報をもとに、分析およびその成果発表をおこなった。

4. 研究成果

研究成果は、クワクワカワクウにとっての

サケ漁業に関するもの、養殖業に関するもの、そしてアート制作に関するものにとわかれる。

サケ漁業については、以下の点が理解された。第1に、歴史的に見て、サケ漁業が先住民社会に経済的にきわめて重要であったこと、第2に、サケ漁業に従事する過程で、先住民はさまざまな先住民固有の労働手法、風俗などを発展させてきたのであり、それゆえ（実際は100年足らずの歴史であるが）この活動が彼らの「伝統」とみなされていること、第3に、いまは衰退しているものの、先住民は依然としてサケ漁業のみずからの中心的な経済活動とみなしているし、将来もそうであってほしいと考えていることである。以上のことについては複数の論文や著作で発表されている。

養殖業については、以下の点が理解された。第1に、養殖業は先住民社会にとって、もろ刃の剣であることである。それは先住民にとってもっとも重要な活動であるサケ漁業がおこなわれる海の環境を破壊しかねないが、反対に、サケ漁業の衰退を経済的に大きく補助してきているからである。第2に、これを受けて、先住民社会は養殖業擁護派と反対派に分裂し、白人社会をまきこんで、両者が激しく議論してきたこと、そして両者の議論が平行線のままであることである。そこで本研究は、つぎに両派の議論が平行線をたどっている理由を、言説分析の手法で明らかにするよう努めた。その結果、第3に、両者の議論が平行線をたどる理由として、それぞれが議論をおこなう立脚点の相違を指摘した。擁護派があくまでミクロな生活世界に根ざした意見を述べるのに対し、反対派は超ミクロな視点（生物学や細菌学など）およびかつマクロな視点（生態系など）から議論をおこなうのである。両者の和解のためには、この議論をおこなう土台を共通にする必要がある。第4に、本研究では各コミュニティが実際養殖業をめぐる具体的な活動をおこなっている活動を追跡調査することにした。とりわけ擁護派有志から組織された「先住民養殖業協会」(Aboriginal Aquaculture Association, AAA)の調査が中心となった。過去に現地先住民らが組織した「先住民同胞団」(Native Brotherhood)との比較から、AAAの現段階での成功は、メンバーシップの非強制、つまり誰にでも緩やかに門戸を開くことから生まれることが理解された。

最後に、最終年度におこなった、アート制作が先住民コミュニティの経済自立に寄与するかどうかの調査については、アート制作もまた先住民社会の経済自立に貢献し得るという結論が導き出された。アート制作は本来個人的なものである。しかしアーティストが名声を得るためには、さまざまな点におい

てコミュニティからの支持を得なくてはならないシステムがコミュニティには存在している。コミュニティから支持を得るためには、アーティストは無償でコミュニティに作品をつくったり、あるいは制作で得た収入の一部をコミュニティに還元したりしなければならないのである。これらのことを通じて、アート制作も間接的にはあるが、コミュニティの経済自立に寄与すると結論できるのである。

以上、クワクワカワクと3つの経済活動との関係をふまえ、本研究では以下の結論を導き出すにいたった。

1) 養殖業のもたらす多額の、しかも安定した収入にも関わらず、クワクワカワク社会は依然としてサケ漁業をみずからの中心的な経済活動とみなしている。つまり収入の多さや安定性だけで先住民の経済開発の可能性を図るのは誤りである。

2) グローバル化やネオリベリズムの進展にともない、「資本主義市場と個人」の結びつきが強くなったことは否定できないが、先住民は依然として親族を軸とした共同体の機能に強く依存している。したがって、先住民がグローバル化に適応し、経済的な事実を模索するにあたっては、共同体としての親族を無視するべきではない。

3) 2) に関連して、本研究では主として先住民社会における経済的側面のみを扱ったが、その結果わかったことは、リーダーシップの問題をはじめとした政治的側面の重要性である。先住民社会では、実際のところ、ほとんどの経済活動が親族などを軸とした共同体を単位としておこなわれるのであり、そこで共同体を主導するリーダーの存在、能力の問題が不可欠となってくる。こうした政治的側面については、今後の研究課題として残される。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 11 件)

①立川 陽仁、「先住民アーティストの交流と文化様式」、『国立民族学博物館調査報告』、掲載決定、2011年発行予定、査読有

②立川 陽仁、「北西海岸先住民の歴史的背景」、『国立民族学博物館調査報告』、掲載決定、2011年発行予定、査読有

③立川 陽仁、「『日本と／かブラジル』という限界を越えて」『人文論叢 (三重大学人文学部紀要)』28号、131-144頁、掲載決定、2011年発行予定、査読無

④立川 陽仁、「ポトラッチ」、「トーテム・ポール」、「銅板 (紋章)」、「クワクワカワク

ウ (クワキウトル)」、「ツォノクワ」、「サンダーバード」、「ヌー・チャー・ヌルス」、「ハント一族」斎藤玲子・大村敬一・岸上伸啓 (編) 『極北と森林の記憶』昭和堂、各 91、95、103、105、108、112、118、148 頁、2010 年、査読無

⑤立川 陽仁、「先住民養殖業協会の設立と活動」『人文論叢 (三重大学人文学部紀要)』27号、191-204頁、2010年、査読無

⑥立川 陽仁、「植民地社会が豊かな階層社会にもたらしたもの」国立民族学博物館 (編) 『自然のこえ命のかたち』昭和堂、79-81頁、2009年、査読無

⑦立川 陽仁、「カナダ・バンクーバー島の先住民クワクワカワクとサケの養殖業——経済 vs. 環境をめぐる三つの次元」岸上伸啓 (編) 『北アメリカ先住民の社会経済問題』、明石書店、273-300頁、2008年、査読無

⑧立川 陽仁、「アーティストの社会的地位と政治力」『トーテムの物語 (北海道立北方民族博物館)』、22-25頁、2008年、査読無

⑨ TACHIKAWA Akihito, “Is Commercial Fishing a Traditional Pursuit? Technological Development of the Commercial Salmon Fishery and Adaptation by Kwakwaka'wakw Commercial Fishers”. Japanese Review of Cultural Anthropology 8, 29-52, 2008年、査読有

⑩立川 陽仁、「現代カナダにおける北西海岸先住民の生業活動」『立教アメリカン・スタディーズ』30号、77-93頁、2008年、査読有

⑪ TACHIKAWA Akihito, “A Review” for Canning Salmon... In the Way We were Taught (author: Al SEWID), Trafford Publishing, back cover page (裏表紙), 2008, 査読無

[学会発表] (計 2 件)

①立川 陽仁、「カナダ北西海岸のサケ漁業と先住民」国際開発学会シンポジウム『先住民漁業と地域開発』2010年6月6日、札幌、北海道大学にて

②立川 陽仁、「北西海岸先住民社会におけるアーティストの社会的位置づけについて」国立民族学博物館共同研究会『カナダにおける先住民芸術の歴史的展開と知的所有権問題』2008年7月20日、網走、北方民族博物館にて

[図書] (計 1 件)

①立川 陽仁、『カナダ先住民と近代産業の民族誌』御茶の水書房、2009年、316頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

立川 陽仁 (TACHIKAWA AKIHITO)

三重大学・人文学部・准教授

研究者番号：20397508

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：